



18:00からのシンデレラ 神坂悠理

かすみは非常に焦っていた。急いで学校からアパートに帰るとカバンを放り投げ、制服をハンガーにかけ、下着を脱ぎ、急いでシャワーを浴びる。十分で上がり、髪を乾かす。白に近い黄色だけどちよつと派手なスーツを着る。

「今日はこれでばっちり！」鏡に映る姿を見て満足そうなかすみ。これから夜の店へと向かうのである。かすみはなんと十六歳。母親とは仲が悪く、一人暮らしを始めた。学校へは母親から仕送りと言うことにしてあるが、一切受け取らずに一人で自活している。もちろん学校にも警察にも知られたらまずい。父親は小学一年のときに胃がんで亡くしている。

かすみは化粧を始めた。あまり濃くなく、かといって薄くもなく。すっぴんに近いがピンクのルージュを引く。身長が百七十センチ近いせいもあって、スーツは違和感がない。目鼻立ちがはっきりしていて美人の部類に入るかすみにとって化粧はすぐ終わる。高校生の姿から大人びた、いや、大人の女性として変身した

彼女。その姿はプロ顔負けである。

「さあ、今日も頑張るわよ！あら、いけない。急がないと遅刻しちゃう」
慌てて飛び出て、急いで鍵をかけるかすみ。そしていつもの道を歩き出した。辺りはもう薄暗くて、あと三十分もしたら暗くなるのだろう。

店は「夜の蝶」と言う名前である。キャバクラとは違って落ち着いた店である。
「ママ、お待たせしました」とかすみと言う。

この店はママとかすみの二人だけである。店を開けるのが十九時なので、お通しなどの準備を手伝うのである。ママはすごく料理上手なので、レシピを聞いてかすみも作ってみる事がある。

「かすみちゃん、いらっしやい。今日は新鮮ないいイカが手に入ったのよ」
鍋に近づくかすみ。イカをしようゆと砂糖とみりんで煮付けたものだった。

「わあ、おいしそう」とかすみはつまみ食いする。

ママは四十代後半で、子供ができにくい体なのでかすみを本当の娘みたいにか

わいがっている。かすみもまた本当の母のように慕っている。

かすみが「夜の蝶」で働くきっかけは、下校途中に出くわしたサラリーマンたちの会話からだった。それは三ヶ月前の入学したての頃の事だった。おぼろげにしか覚えてないが「夜の店と言うのはいろんな人たちが集まり、われわれの知らないことまで知っているから恐れ入ったよな。」「そうだなー」とこんな感じである。それからかすみはコンビニのバイトをやるうとしていたのをやめて、必死に夜の店を探した。しかし、かすみの年齢を聞くとどこも渋い顔をする。かすみは泣きたくなった。「ここでだめなら…」とダメもとで「夜の蝶」を訪ねた。ママもやはり最初は渋い顔をした。かすみは「どうしてもこれから生きるために働きたいんです！お願いします！」と頭を下げて懇願した。そうして十五分たっただろうか、ママは根負けしたのか、「いいですよ、うちで働きなさい。その代わりに何かあったら私にすぐ相談すること。年は二十歳と言うことにしてね。バイトは週に二日でもいいかしら？」と言ってくれた。

かすみは、ママに感謝している。普通なら断られて当たり前なのに、働かせてくれる。働くと言うことがこんなにも楽しく、また大変なことを教えてくれる。

「かすみちゃん、七時だし、そろそろ店開けるわよ。」ママが言う。

「はい。」とかすみ。

鍵を開け、五分もしないうちにスーツ姿がびしつと決まっている男が来た。

「いらっしやいませー」とかすみ。

男はカウンターに座った。見た目三十代前半くらいである。ママはお通しを出して、「初めてですね」と言うと「そうです。この通りといい、店構えがいいからふらつと入ってみました。」

かすみは、ママと男がどんな会話をするのか、ママのそばで聞いていた。

「随分若い子だなあ、いくつ？」と男はかすみを見る。男の問いに「二〇歳です」と答えた。男は驚いた。「え、もっと若く見えるよー。ホントはいくつ？」

かすみはまさか十六歳とは言えないし、困惑した。

すかさずママが、「この子若く見えるけど二十歳なんですよー」と助け舟を出してくれた。

「そうなんですか、ママの娘さんですか？」と男は言う。

「知り合いの娘さんに手伝ってもらっているんですよ」とママ。

「年と言えー俺何歳に見えますか？」と男。ママもかすみもちよつと困った。どう見ても三十代前半。若く言っているのか…

男は「二人とも困っているようだから言いますよ。これでも二十八歳なんです。

IT関連の会社の代表取締役です。」と言うと名刺を渡した。

名刺には「株式会社アイデアカンパニー 代表取締役 高橋 浩一郎」とある。

「あ、ボトル入れますね。」と浩一郎は言った。

「ありがとうございます」とママとかすみは揃って言った。

グラスに氷を入れて、ウイスキーを入れ、ミネラルウォーターを入れてかき混ぜる。程よく混ぜたので「どうぞ」とかすみは浩一郎の前に差し出した。

グラスをゆらゆらとさせながら一口飲む浩一郎。若いわりにおとなしい飲み方をするとかすみは思った。と同時にその光景が焼きついた。

浩一郎はたわいもない話をしながら、ゆつくりとグラス一杯飲むと勘定し、帰って行った。入れ違いに四人お客さんが来た。その後もお客さんが来てわいわいがやがやと楽しかったが、浩一郎の事がすごく気になっていたかすみだった。

後片付けも終わり、ママが「かすみちゃん、もう帰っていいわよ」と言う。時計を見ると二十三時。かすみは「はい」と言うど帰り支度を始めた。残っていたお客さんは「かすみちゃん帰っちゃうの？」と残念そう。「またお会いしましょう」とかすみは言い、ママに「お先します」と言っ、裏口から出た。

かすみは帰り道、何気なく暗闇でのデパートのウィンドウショッピングを楽しんだ。春もののドレスが飾ってあった。近寄って値札を見ると到底買えるような値段ではなかった。

「気持ちだけ買うことにするわ」とかすみはつぶやき、急ぎ足で帰った。

アパートに帰ると、かすみは化粧を落とし、スーツを脱ぎ、シャワーを浴びる。シンデレラの時間はおしまい。着替えて就寝した。

日曜日、かすみは帰り道に見たドレスを見に行った。薄いピンクですごく上品な、それでいてセクシーな感じがした。

「これが欲しいのかい？」後ろから聞きなれたような声がする。

振り向くと浩一郎であった。かすみは驚いて声も出なかった。

「君に似合うと思うよ、試着してみようか？」と浩一郎。

「浩一郎さん、あの…」かすみは心臓がばくばくした。

「偶然だね。ここで会うなんて。店では緊張したよ。君みたいな美人に会えてさ。ずっと気になっていたんだ。」浩一郎は言う。

「私も緊張しています。また会えるなんて嬉しいです」とかすみ。

「じゃあ、中に入ろうか」

浩一郎はかすみの手をとる。かすみは「はい」と言うと一緒にデパートの中に

入っていった。中はセール中らしくて賑やかであった。

「俺ってどう思う？」唐突に浩一郎はかすみに聞いてきた。

「え、え・・・」戸惑うかすみ。高校には幼げな男子高生しかいなくて、大人の男を間近で見るのは初めてではないけれど、変に意識してしまうかすみ。

「あ、あのととても素敵な人だと思います」と言うのが精一杯であった。後は顔を真っ赤にしてうつむいていた。浩一郎は「お、俺なんか困らせるような質問しちやったかな？」と慌てふためいた。その姿はまるで十代の少年のようだった。かすみはくすつと笑った。

「緊張の糸がほぐれたようだね」浩一郎は真っ赤な顔をして言った。

かすみも真っ赤な顔をしていた。うなずくのが精一杯だった。お互い顔を合わせて笑った。

「とりあえず、何か飲み物でも飲もう」浩一郎はカフェに行こうと提案した。いつものかすみらしくないと自分で感じながらも浩一郎のペースにはまっ行って行

ている。それが何とも心地よい。紳士な人なのかと思ったら、ちよつと少年っぽさが残っている。親近感が湧いてきた。かすみのことを子ども扱いしないところもまた好感が持てる。

ぐるぐる回っている見えて歩きながら、カフェを見つけた二人。

そこは気取った感じではなく、かといつて高校生がたむろするような店ではない。い。

「ここ、入ろうか」浩一郎が言う。

「そうですね」とかすみ。

いらっしやいませの声が奥から聞こえてきた。店員が駆け寄る。

「何名さまですか？」

「二名です」と浩一郎は言う。

かすみは辺りを見回した。どうみても高校生が入るような場所ではないなと思

「どうしたの？」 浩一郎が心配そうな顔をする。

かすみは場違いなところにきたような感じがした。自分がこんなところにいるのかとさえ思った。それを浩一郎に告げた。

「そんなこと気にしていたの？ 君は夜、大人並みに働いているじゃない。」

「でも今は・・・今はただの高校生です。欲しい物も買えず、学校に通うのがやつの生活を送っているんです。」 かすみは我に返った。

「二名でお待ちのお客さま、こちらのテーブルが空きました」と店員が言った。

浩一郎はかすみの肩を抱き、「さあ、行こうか」とリードした。暖かい大きな手。体温が伝わってくる。かすみはどきつとした。大人の男の人ってこんななんだー。

席に座ると店員がメニューを置いていった。

「お決まりになりましたらそのボタンを押してお呼びください。」

「わかりました。」と浩一郎。

かすみはメニューを見た。バイトの時給が吹っ飛びそうな金額が書かれてあった。

「何でも好きなものを頼んでいいんだよ。」と浩一郎が言った。

これが大人の余裕なのかな・・・

かすみはそう思った。

かすみは無難なアイステイにすると浩一郎に言った。

「え？ パフェとか食べないの？ もしかしてかすみちゃん遠慮している？ 遠慮しなくていいんだよ。」 浩一郎はどうしてもかすみにパフェを食べさせたいらしい。かすみもパフェは嫌いじゃないし、ここまで言ってくれているのに遠慮するのも気が引ける。

「じゃあ、パフェもいただきます。」 かすみは遠慮しいしい言った。

「俺、男だからパフェ食べないけど、あれってきれいだよなー。」

メニューを閉じるとボタンを押した。

すぐに店員が来て、注文をとりに来た。浩一郎は「アイスコーヒーにバナナパフェとアイステイお願いします。」「かしこまりました、アイスコーヒーにバナナパフェとアイステイですね。少々お待ちくださいませ。」と店員は一礼して足早に奥のほうに行った。

「かすみちゃん、って呼んでいいかな。」と浩一郎が照れくさそうに言う。

かすみは戸惑った。一体どういう意図でそう言うんだろう。こんな経験初めて。どうしたらいいの、どうしたらいいの？

下を向いているかすみ。照れくさそうにしている浩一郎。二人の時は一瞬止まった。

「あの」「あの」かすみと浩一郎が同時に言った。かすみは「浩一郎さんからどうぞ」と言った。浩一郎は「俺のこと好きになつてくれるとうれしいな。」少年のような顔をして言った。「あ、あの、私も浩一郎さんのこと好きです。」かすみはやつとの思いで言った。

「本当？嬉しいな、初めて見たときから忘れられなかったんだよ。」浩一郎は言った。かすみは「ママの店ですか？あの時は嘘ついてごめんさい、実は私・・・」かすみがそういうと遮るように、「知っているよ。あのあとかすみちゃんが休みだった後もあの店に通ったからママにこっそり聞いたよ。偉いね、バイト代で学校に通っているなんて。俺なんて全部親掛かりで苦労知らずもいいところだよ。」と浩一郎が言うと、かすみは「身内のことを話すのはちよつと気が引けるのですが母と折り合いが悪くて。」といいづらそうに言った。タイミングよく店員が来た。アイスコーヒーとアイステイを持ってきた。それぞれの位置に置くと「バナナパフェはもう少しお時間がかかりますので少々お待ちください」と言うのと礼をして奥に引っ込んでいった。

「かすみちゃんが見ていたドレスだけど、君に似合いそうだね。バナナパフェ食べたら見に行こうか」浩一郎がにこにこして言った。

かすみは嬉しい気持ちでいっぱいだった。人を好きになると言うことがこんな

にも暖かい気持ちになれるなんて。アイステイはひんやりしていて、おいしかった。浩一郎さんは若いのにやり手でそれをおくびにも出さずに頑張っている。すべてを見てきたわけではないが彼の会話が物語っている。

かすみは彼の話を聞いていた。彼は会社のこと、いろんなことに関して熟知している。しかし、決して偉ぶったりしない。むしろ控えめな態度である。大人で時折少年のようなしぐさを見せる彼。かすみはそんなギャップの激しいところが好きになっていった。

ぼうつと彼が話しているところを見入っていたかすみ。そこへ店員がバナナパフェを持ってきた。

「これで最後ですね。ごゆっくりお召し上がりください」と言う奥に引っ込んでいった。二人は笑った。見るとスプーンやフォークが二つずつある。「二人で食べようか」と浩一郎。かすみはいつも一人で食べきれないから「はい」と答える。バナナパフェは今にも崩れそう。「浩一郎さん、崩れそう」かすみが言うと

「大丈夫、二人で半分こして食べよう。」と浩一郎。二人は夢中になって食べた。

途中ソフトクリームのところ崩れそうだったが一生懸命二人で食べた。

食べ終わると、二人とも口の周りが白くてお互い笑いあった。

「パフェって意外とおいしいんだな。一緒に食べる人ができて嬉しいよ。」と浩一郎。

「一人で食べるより二人で食べるほうがすごくおいしかった。」とかすみ。

「さて、そろそろドレスを見に行こうか」と会計をしに行く浩一郎。かすみは後からついていく。

会計を済ませると、ドレスのあるテナントに向かった。入り口に近いところだったので、また戻るような形になるが、二人は歩いていった。

「かすみちゃんに似合うよ、あのドレス。」浩一郎はニコニコしながら言った。かすみは着れるだけいいかなと思ひ、「そうですね」とだけ答えた。

二人は、無言になった。その代わり手をつないでいる。ぐるぐる回ってきた道